

計画的な宇都宮の町作り 本多正純の町割り

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司

宇都宮市の周辺市街地には、昔の農道の縁辺に次々と住宅を作る場当たり的な宅地開発が行われた所が少なくない。戦後の急激な経済発展にともなう住宅の建設に、行政による都市計画が追いつかなかったのである。こうした無計画な都市開発の姿を見るにつけ、宇都宮城址公園の西側等にみられる整然と区画された道路網に、江戸時代の計画的な町作りを垣間見、その見事に感心するのである。

町割りとは、町を設けるために土地を仕切ることをいう。都市計画のことである。宇都宮の町割を大々的に行ったのは、本多正純である。本多正純は、徳川家康に仕え絶対的信頼を受けた譜代大名で、元和五(一六一九)年十月宇都宮藩主に就任してから元和八(一六三二)年八月に出羽国に配流となるまでの僅か三年弱の間に、宇都宮城の大改修と町割を

断行したのである。

城下町は城を中心とした町である。城を中心に守りをいかに強固にするか、流通・経済といった都市機能をいかに発展させるかが町作りの鍵となる。宇都宮城の本丸は、台地の東南端にあり、東側を田川が流れ防衛ラインとなり、町は城の東から北西にかけて広がっていた。正純はこうした従来の城郭と町を近世の城と城下町に改修整理したのである。

大略は江野町の二つ橋際から松が峰まで(東京街道に沿う所空堀を掘り、城郭を西に大きく広げ、もと宇都宮大明神(一荒山神社)の南、釜川を渡った所(今の御橋)にあった大手門を西方の江野町に移動した。さらに宇都宮大明神の上の宮と下の宮との間の丘陵を切り崩し、切り通し(今の大通り)を作り上町と下町の通行を便利にし、奥州道と日光道を付け替えたこと等がある。奥州道と日光

道の付け替えは、不動前から現在の下河原の常念寺付近を北上した奥州道と、不動前から松が峰・池上の旭坂へと北上した日光道を西に移し、奥州道と日光道は現在の新町から伝馬町まで同じ道にし、そこで分岐、新日光道はそこから北へ、新奥州道はそこから今の大通りから、オリオン通り・日野町通り・大町通り、上河原通りへとほぼ市街地をめぐるようにしたものである。一方、城を中心に武家屋敷を配置し、東側の低地および日光道・奥州道沿線には町人屋敷を配置、奥州道と日光道が分岐する交通の要衝地には伝馬役や本陣・脇本陣等を配置、市街地の外延部に寺を配置して防衛ラインとし、また、道路は碁盤目条にし、所々筋違い十字路や丁字路にして防衛を固めた。

正純の城の改修と町割りは、城下町宇都宮の形成にとって実に利に叶ったものである。ところで現在、宇都宮市は中心市街地が衰退し空き家が増加する一方、周辺市街地では住宅地が拡大しつつある。しかし将来人口の減少は必至であり、また経済発展も今までのようには望めそうもない。今後ますます空き家は増え、したがって都市インフラの利用効率は悪くなる。かくなる上は、都市機能の効率化を図った、いわゆるコンパクトシティを目指すべき町作りが急務である。そうした折、本多正純が行った町割りを考える上で、よい手本になるのではなからうか。



「宇都宮城下絵図」(延命院蔵)



城下町の名残りの鉤の手の道